

国際教育研究フォーラム

2021年 6月

国際教育研究所

目次	ページ
コロナ危機で急増するオンライン留学	小山 悦司 1
今後の放課後児童クラブについて	延原 靖子 2 ~ 5
専門科目における学生による自主学習とプレゼンテーション	植木 岳雪 6 ~ 12
編集後記	12

コロナ危機で急増するオンライン留学

国際教育研究所所長 小山 悦司

文部科学省は、グローバル人材の育成を目標に掲げ、留学生交流の促進や大学等の国際化を図る政策を推進してきた。しかし、新型コロナの世界的パンデミックの中で、自国第一主義の風潮が蔓延し、グローバル化の流れが中断・後退するのではないかと危惧がある。

コロナ危機は各国の大学等に深刻な影響を与えており、とりわけ留学生交流や国際化施策に大きな打撃となっている。国際大学協会（International Association of Universities）の調査によれば、世界の111の国・地域にある424大学のうち89%の大学で留学生の受入れなどに大きな支障が出ており、様々な対応策が講じられている（2020年5月レポート）。

その具体的な方策の一つが、海外渡航を伴わないオンライン（バーチャル）留学である。2020年は「オンライン留学元年」とも位置付けられており、ICTを活用した新たな工夫や変革により、大学等でのグローバル人材育成が飛躍的な進化を遂げる可能性がある。

オンライン留学の代表的な取組として国際的に注目されているのは、1) 学習者主体による地理的・文化的に異なる人々との交流や異文化理解の習得等を目指すバーチャル・エクステンジ（VE）、2) 外国の大学で提供している授業をオンラインで履修登録し現地学生と共に学ぶバーチャル・モビリティ（VM）、3) 国際的な協働学習を通してグローバル人材に必要な能力の獲得を目指すCOIL（Collaborative Online International Learning）の3形態であり、米国や欧州をはじめ日本を含む諸国での取組が急増している。

オンライン留学は、そもそも留学の本来的な意義である「外国に在留して五感を通して知識や文化を体得する」には解決すべき課題は多く、加えて時差やネット環境上の問題などが指摘されている。しかしながら、時間や場所にとらわれず、多様な学生たちが学び合い、高め合うことのできるシステムを提供することは、これまで以上に多くの学生が留学を身近に感じ、グローバルな意識や感覚を向上させる絶好の機会となり得るものと考えられる。

その意味からしても、オンライン留学をコロナ危機への応急的な対応に終わらせてはならない。留学交流を含む国際教育交流における抜本的なデジタル・トランスフォーメーション（DX）として、新たな価値や変革を生み出す契機として前向きに捉えるべきではなかろうか。

今後の放課後児童クラブについて —岡山市の構想に思うこと—

倉敷芸術科学大学大学院修了生

(2016年3月修了)

延原 靖子

1. はじめに

昨今の子どもの育成環境において夫婦共働き家庭が多い中、小学生に於いての放課後児童クラブの存在は大きく、保護者が安心して仕事を続けられるよう、必要な児童を可能な限り安全に預かっていくため、また各クラブの持続的かつ安定的な運営を構築するため、そして現在各クラブが抱えている運営上の課題を解決するため、岡山市では令和元年5月に「岡山市放課後児童クラブの今後の運営」(案)について説明会を開催し、市内の児童クラブへ今後の運営に関しての案を提案した。

今回、提案された内容を考察し今後の子どもの育成支援について考えたい。

2. 今後の運営(案)について

(1) 目的

保護者が安心して仕事を続けられるように、対象の児童を安全に預かり、各クラブの持続的かつ安定的な運営を構築するため、そして各クラブが抱えている運営上の課題やクラブ間でのサービスおよび保護者負担金の差を無くし、過重になっている支援員の事務負担や運営委員会の運営上の責任を軽減するため。

(2) 岡山市の意向

- ①基本的な考え方は、市が責任を持ってクラブ運営に関わりながら保護者のニーズに応え運営上の課題を克服していく。
- ②目指す姿としては、どのクラブでも同じ水準のサービスが受けられ、利用者の満足や安定感が高まること、および支援員等の待遇が向上し必要な人員を確実に確保することにより、支援員が児童の育成に集中して関われるようになること。
- ③見直しに当たっては、児童の育成支援の充実を第一に考え、各クラブの現状を踏まえた上で、全体のバランスを重視した内容とし、見直し後の利用環境が大きく変わらないよう、利用者の視点を意識するとともに、地域の実情にも配慮する。そして受益と負担のバランスのとれた金額へ保護者負担金を見直す。また、各クラブの支援員の事務処理負担の軽減を図り、児童の育成支援に集中できる業務環境を作り、待遇改善

向け、適正な雇用条件を設定する。

(3) 移行支援

統一ルールや移行に関する理解、周知を図るため、可能な限りの説明に努め、必要に応じて、個別の相談や助言等を行い、移行検討中は、従前どおり補助金を支出する。

(4) 移行決定

移行することを判断したクラブについては、移行申請書を提出し、ヒアリング等の順を経て、最終的に市が移行を決定する。移行を決定したクラブは、岡山市の条例において「公の施設」に位置づけ、市の直轄クラブとしたうえで、運営をふれあい公社に委託する。

(5) 新体制へ移行しないクラブの取り扱い

統一ルールに賛同せず、移行期間終了後も運営委員会による運営を継続するクラブについては、これまで通り補助金による支援を継続するが、市条例による「公の施設」としては位置付けない。課題が起きた際の解決等は、各クラブの運営委員会が主体的に取り組むことになる。

3. 運営内容について

(1) 運営方針（考え方3つの柱）

- ①子どもに適切な遊び及び生活の場を与え、子どもの状況や発達段階を踏まえながら、その健全な育成を図る。
- ②子どもの最善の利益を考慮した育成支援の推進。
- ③学校・地域・保護者と連携し育成支援を行うとともに、家庭の子育てを支援する。

※この運営方針（考え方3つの柱）は「放課後児童クラブ運営指針」

（厚生労働省第1章2「放課後児童健全育成事業の役割」を参考に作成した。）

(2) 育成支援の内容

- ①子どもが自ら進んで放課後児童クラブに通い続けられるよう援助すること。
- ②子どもの出欠の確認と心身の状態を把握して、適切に援助すること。
- ③子ども自身が見通しを持って主体的に過ごせるようにすること。
- ④放課後児童クラブでの生活を通して、日常生活に必要な基本的な生活習慣を習得できるようにすること。
- ⑤子どもが発達段階に応じた主体的な遊びや生活ができるようにすること。
- ⑥子どもが自分の気持ちや意見を表現することができるように援助し、放課後児童クラブの生活に主体的に関わることができるようにすること。
- ⑦子どもにとって放課後の時間帯に栄養面や活力面から必要とされるおやつを適切に提

供すること。

⑧子どもが安全に安心して過ごせるように環境整備するとともに、緊急時に適切な対応ができるようにすること。

⑨子どもの様子を日常的に保護者に伝え、家庭と連携して育成支援を行うこと

(3) 活動内容

平日は、自主学習(宿題)、室内外での遊び、おやつを提供、クラブ教室の掃除、片付け等とし、土曜日、長期休暇期間中は、自主学習(宿題)、室内外での遊び、昼食、おやつを提供、クラブ教室の掃除片付け等とする。その他イベントの実施、避難訓練等も行う。

(4) クラブの行事等について

クラブ主催の行事等を実施するためのガイドラインを市として定め、ガイドラインに従って、適切に行事等を実施していく。

主な共通行事例としては、入所式(歓迎会)、卒所式(お別れ会)、誕生日会、季節行事(七夕、クリスマス、お正月、節分、お雛祭りなど)であるが、必ず実施するものではない。各クラブが独自で実施するその他の行事等はガイドラインに基づき個別に決定し、一定の範囲内において実施できるよう検討する。また、クラブ主催の行事と保護者会主催の行事等は区別して行う。

(5) おやつ等について

市として共通のガイドラインやマニュアルを定め、適切なおやつを提供をすることとし、クラブ内でおやつ等を調理し提供することは、食品衛生管理上の観点から認めないこととする。土曜日や長期休業期間中の昼食については、お弁当の持参を原則とする。

4. 地域・学校等との連携

(1) 地域連絡会議

保護者や地域等の意見を運営に反映するとともに、継続的な連携協力を得るため学区ごとに定期的に連絡会議を開催する。

① 役割・目的

市およびふれあい公社は地域連絡会議の意見等を運営に反映するよう努め、児童クラブの運営にあたり、学校・地域と情報を共有しながら相互に連携協力を図る。

② 参加者(例)

(地 域) 町内会長、民生委員地区会長、主任児童委員、愛育委員会、婦人会会長
老人クラブ会長、等

(保護者) 児童クラブ保護者、PTA 会長、等

(学 校) 校長、等

③ 会議・協議内容

会議は学区ごとに年数回開催し、クラブ運営および学校・地域との連携、また保護者からの意見等の調整に関することを協議内容とする。

(2) 保護者会

クラブとは別の組織と位置づけ、保護者による自主的な運営等をお願いする。

5. 今後の子どもの育成支援に思うこと

今回提案された、放課後児童クラブの運営母体に関する移行の内容は各クラブの持続的かつ安定的な運営を構築するための対策が提案されており、現在各クラブが抱えている運営上の問題及び育成支援内容の格差をなくすために、保護者の利用できるサービスの平準化が図られる運営ルールが示されたことは大きく評価される。

クラブ運営を一元化し、事務処理や職員を集中管理することで本来支援員が行う、子どもの育成支援への時間確保が可能となり、より安全で安心して子どもが生活できる場としての意義があると考えられる。

主任児童委員として放課後児童クラブの支援に関わり、今回の岡山市からの提案について考えるにあたり、心豊かな子どもを地域一体となって育てる必要性をより一層強く感じた。これからの時代を担っていく大切な子どもが健やかに育っていくためには、放課後児童クラブの整った環境は最優先されるべきだと考えられる。子どもの育成支援に貢献できるよう各クラブでの検討が期待される。



専門科目における学生による自主学習と プレゼンテーション： 主体的・対話的な学びをもたらすアクティブラーニングとして

帝京科学大学 植木岳雪

1 はじめに

大学の専門科目で、どこまでの内容を教えるべきかは難しい。例えば、その科目が必修科目か、選択科目かや、その科目を卒業研究に必要な学生が履修するか、単位を取ることのみが目的の学生が履修するかによって変わってくる。両者で、学生の基礎学力や学習意欲は大きく異なると思われる。一方、その科目が教員の専門と一致しているか、類似しているか、専門外であるかでも変わってくる。

千葉科学大学の「土壌の科学」は、危機管理学部環境危機管理学科（現在は募集停止）の専門科目である。2015年度までは、坂本尚史教授が自身の専門である粘土鉱物学を教えていたらしい。2016年度と2017年度は、地形学・地質学を専門とする著者が担当することになったが、土壌学は専門外である。当時、卒業研究で土壌そのものをテーマにする学生はおらず、植物、気象、水、海洋生物をテーマにする学生が、その科目の単位を取ることのみを目的として履修していた。

そこで、「土壌の科学」で教える内容を人の生活と関わりがある農学としての土壌学（栽培土壌学, edaphology）とし、教科書を網羅的な専門書ではなく、トピック的で気軽に読める新書とした。そして、2017年度には、一方向型の講義と双方向型のアクティブラーニングを併用した。アクティブラーニングは、学生による自主学習とプレゼンテーションを採用した。その結果、学生からは非常に良い授業評価が得られた。

本報告では、2017年度の「土壌の科学」におけるアクティブラーニングの実践を紹介し、学生による評価を示す。

2 授業全体の流れ

「土壌の科学」を履修した学生は、環境危機管理学科の3年生17名と4年生1名の合計18名である。教科書は、久馬（2010）の新書「土の科学」とした。この本は、「土とつながるいのち」、「呼吸する土」、「土はどうやってできたのだろう」、「モンスーンアジアの水田と土」、「日本の畑の土が水田を広めた?」、「いま土が危ない」、「土の中の生きものたち」、「土を肥やす」、「土を生かす」の9章から構成される。各章は15ページ程度であり、1回の授業で取り上げる内容として適当な量である。

毎回の授業では、すべての学生に、事前に授業で取り上げる章を読んでおいてもらった。教科書の1章に2名ずつ学生を割り当て、その章に関係する話題を自主的に選ばせて、内容をまとめておいてもらった。授業の前半は、著者がその章の内容をまとめ、板書した。教科書と同じ著者の2冊の専門書（久馬，1997，2005）から、教科書の内容を補うためのプリントを配布して、解説した。後半は、学生によるプレゼンテーションとした。2名の学生に、10分程度で板書によって話題提供させた。

最後の2回の授業では、学生によるプレゼンテーションとして、ポスター発表を行った。学生には、以前話題提供した内容をより詳しく調べさせ、事前に模造紙にポスターとしてまとめさせた。10分程度の発表時間で、ポスターを黒板に固定し、口頭で説明させた。ポスターは、授業後に廊下に張り出して、学科の教員やほかの学生が見られるようにした。

3 学生が作成したポスター

学生が作成したポスターの例を図1から図4に示す。ポスターには、マジックや色鉛筆でカラーのイラストを描いたり、強調するテキストを色付けしたり、写真をプリントアウト

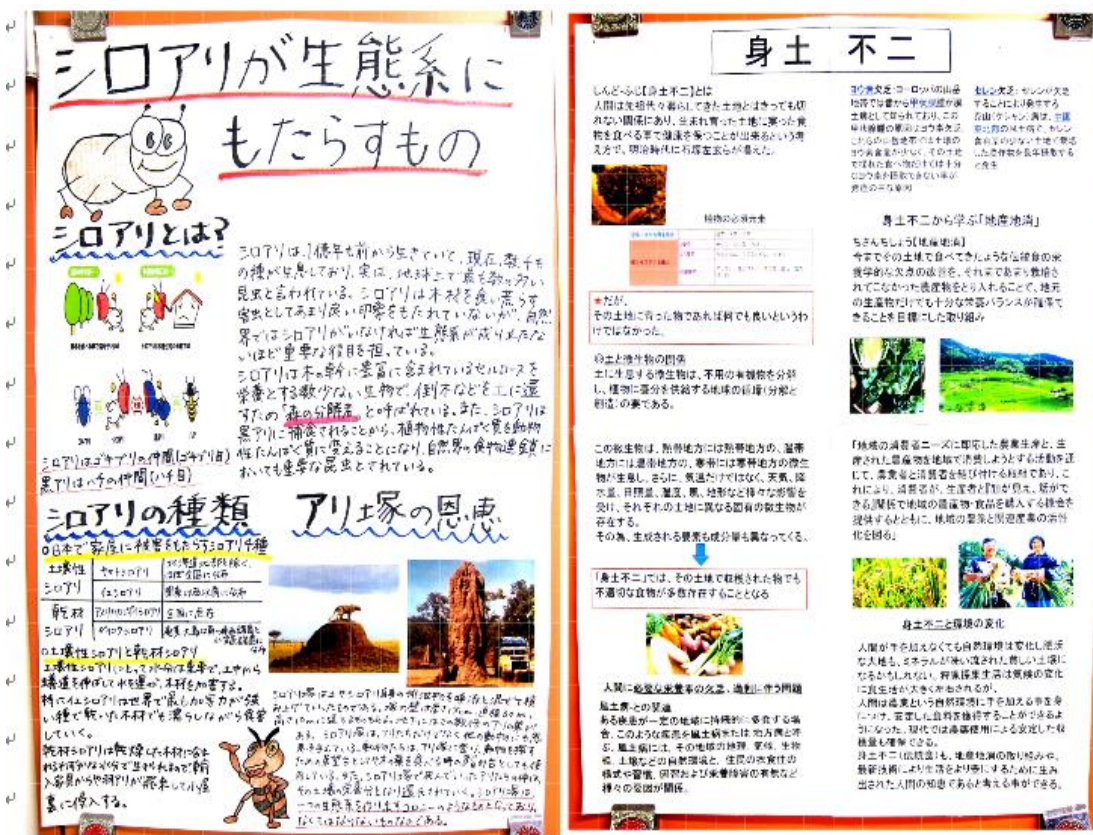


図1 学生の作成ポスター（右はワープロソフトで打ち出し、切り貼りしたもの。）

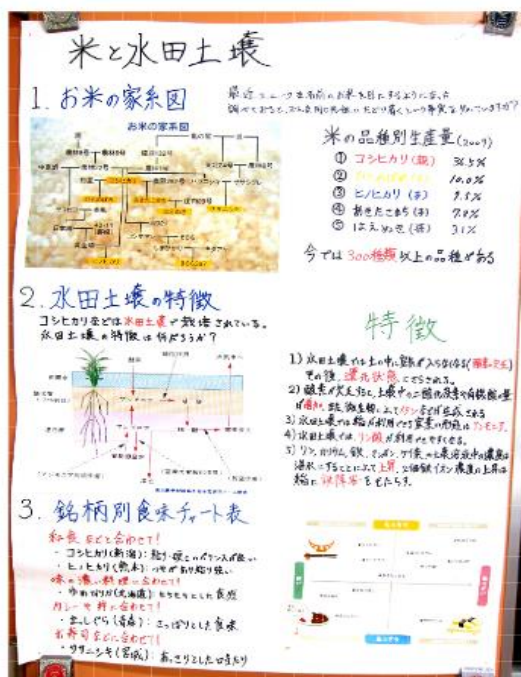


図2 学生の作成ポスター

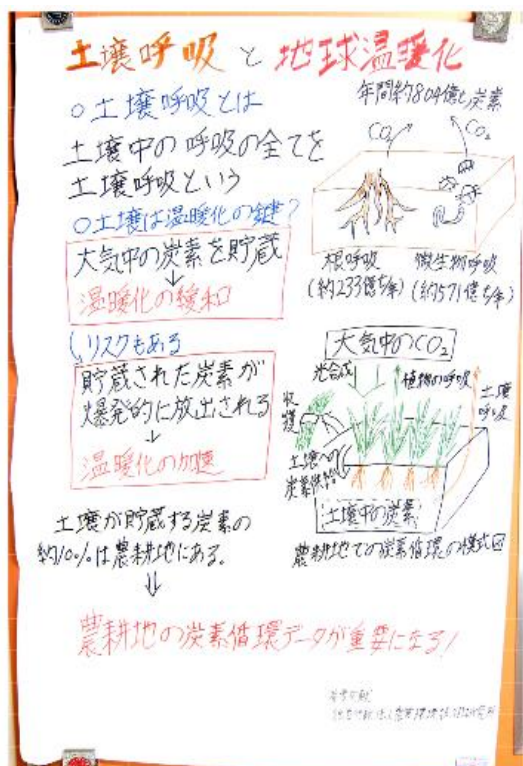


図3 学生の作成ポスター

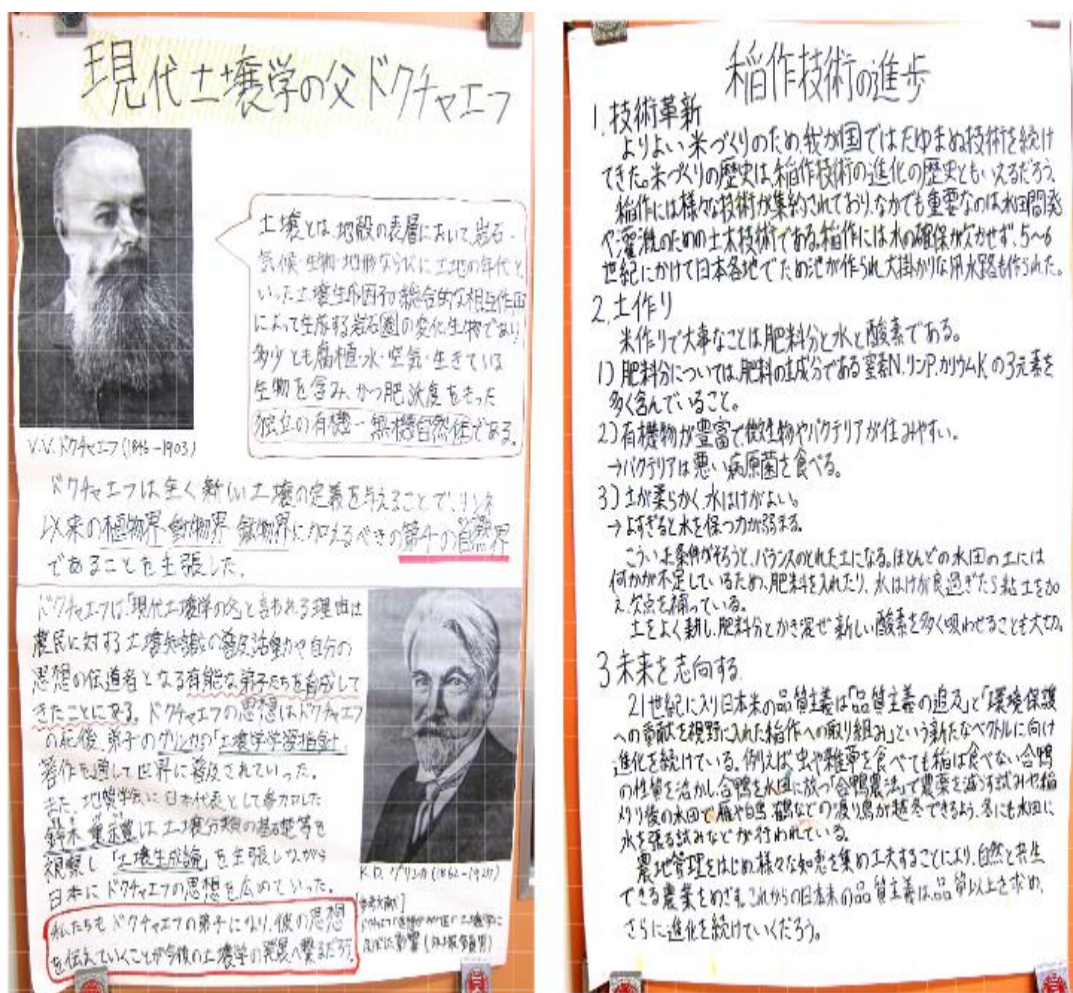


図4 学生の作成したポスター (左が科学史の観点からまとめたもの)

トしたり、学生ごとに工夫が見られた。テキストは手書きがほとんどであったが、ワープロソフトで打ち出し、切り貼りしたものもあった。特筆すべきは、科学史の観点からまとめたものであり、着眼点が良いと感心した。

4 プレゼンテーションについての学生の評価

定期試験の開始前に、授業全体に対するアンケート調査を行った。授業全体については、5点満点で4.6点であった。学生による話題提供については、5点満点で4.6点であった。表1のように、話題提供についての自由記述では、理解を深めことができた、楽しかった、ほかの人の発表が参考になったという肯定的な意見が出された。学生によるポスター発表については、5点満点で4.3点であった。表2のように、ポスター発表についての自由記述で

は、ポスターを作成することが良かった、後で確認できること、理解を深めことができた、プレゼンテーションの練習になったという肯定的な意見が出された。このように、学生から、自主学習とプレゼンテーションによる主体的な学びに対して、非常に良い授業評価が示された。一方、教員にとっては、専門外の科目の学習内容を広げ、深めることになったことが良かったと感じた。

表1 話題提供についてのアンケートの自由記述

-
- ・自分のその分野の理解を深めることができました。
 - ・自分で好きなテーマについて自分で調べることで、より深く知ることができた。
 - ・教科書を読み込むきっかけになる。

 - ・話題提供を考えるのが楽しかった。
 - ・調べるのが楽しく、思ったより面倒ではなかった。

 - ・友達の話提供で興味深い話や面白い話が聞けて良かった。
 - ・様々な話題提供があったので、知識を深められて良かった。
 - ・なるほどと思うことが多くあった。
 - ・様々な目線で色々なことを知れて良かった。
 - ・それぞれの個性が出ていた。土壤への関心を高められた。
-

表2 ポスター発表についてのアンケートの自由記述

-
- ・話題提供は基本黒板。しかし、ポスターは文字や絵を使えたことが良かった。
 - ・楽しく作ることができた。パワポと違って範囲が紙1枚だから、難しかった。
 - ・話題提供と一味違った発表が見れて良かった。ポスターの書き方が人それぞれでおもしろかった。
 - ・ポスターの作り方など、人それぞれ個性があっておもしろかった。
 - ・手を動かしたこと。

 - ・あとでまた見れる。

 - ・話題提供よりも濃い内容で発表して、皆がわかりやすいように説明するように努められた。
 - ・話題提供で話たことを自分でまとめ、整理できた。
 - ・1人1人の個性がよく出ていて、話題提供よりも良い、深い内容になっていて、良かったです。
 - ・総まとめとしてわかりやすかった。

 - ・人前で発表する練習にもなって良かったと思います。
-

5 おわりに

教員の専門外の科目で、学生が単位を取ることをのみを目的としてその科目を履修している場合、一方向型の講義だけではなく、双方向型のアクティブラーニングを取り入れることが、学生の学習意識を高め、授業の満足度を上げるために重要である。その際には、身近な生活をテーマとして、一般書を教科書にすることも有効である。アクティブラーニングとしての学生によるプレゼンテーションについては、今回の板書とポスターによるポスター発表とは別に、最近、ジグソー法によるポスターツアーや口頭試問と組み合わせる方法が多数試みられている（加藤・後藤，2015；長谷川，2017；石川，2017；竹中・餅，2017；松永，2018；谷口，2018；寺田，2018；柳原ほか，2018，2020；間所，2020；高田ほか，2021）。今後、そのような新しいポスター発表の方法を実践したいと考えている。なお、著者は学生によるプレゼンテーション以外にもさまざまなアクティブラーニングを試行しているので、別の機会に紹介する予定である。

引用文献

- 長谷川雄（2017）口頭試問を活用した自然科学系教科の主体的・対話的で深い学び. 岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要, 17, 41-45.
- 石川希美（2017）教職科目におけるアクティブラーニング ポスターセッションの手法を用いて. 札幌大谷大学社会学部論集, 5, 57-73
- 加藤竜哉・後藤 真（2015）アクティブ・ラーニングにおける 新たなポスターセッションの提案. 桜の聖母短期大学紀要, 39, 25-41
- 久馬一剛（1997）最新土壌学. 朝倉書店, 216p.
- 久馬一剛（2005）土とは何だろうか?. 京都大学学術出版会, 299p.
- 久馬一剛（2010）土の科学. PHP 研究所, 206p.
- 間所祥子・關谷暁子・砂原伸行・柳原清子・松原孝祐・武村哲浩（2020）ポスターツアー，ワールドカフェによる高大接続プログラム「将来の医療と医療人について考える」：定量テキスト分析による教育実践の効果検証. Journal of wellness and health care, 44 (1), 81-90.
- 松永 豊（2018）教育方略に即した授業支援ツールの開発と実践. 愛知教育大学研究報告 教育科学編, 67-I, 203-207.
- 高田由美・佐藤美恵子・吹田夕起子・疋田由香・林 孝平（2021）老年看護学実習の学びにポスターツアー（ジグソー法）を用いた教育実践の評価. 日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学紀要. 25, 13-20.
- 竹中龍範・餅 知隆（2017）知識構成型ジグソー法を用いたポスターツアーの試み ―英語

- 授業にアクティブ・ラーニングを取り入れてー. 香川大学教育実践総合研究, 34, 41-54.
- 谷口富士夫 (2018) 初年次教育におけるアクティブ・ラーニングとしてのポスターツアーの有効性:「初年次セミナー」初年度の実践報告. 名古屋女子大学紀要 家政・自然編 人文・社会編, 64, 493-503.
- 寺田篤史 (2018) アクティブ・ラーニングで「道徳を考える」学びへ:ポスターツアーを用いた倫理学入門の試み. 徳山大学総合研究所紀要, 40, 73-82.
- 柳原清子・松井希代子・小田 梓・長棟瑞代・北川麻衣 (2018) 基礎看護学の「看護過程の枠組み (モデル)」の学習にアクティブラーニングを用いた教育の検討. Journal of wellness and health care, 42 (1), 105-112.
- 柳原清子・松原孝祐・間所祥子・關谷暁子・砂原伸行・武村哲浩 (2020) 初年次導入教育における「多職種連携学習 (IPE)」の評価: PBL/ ポスターツアーの実践から. Journal of wellness and health care, 43 (2), 75-84.

【編集後記】

「国際教育研究フォーラム」89号では小山悦司所長、延原靖子氏、植木岳雪氏の3編のエッセイを掲載しました。

小山所長は「コロナ危機で急増するオンライン留学」と題して、コロナ危機で急増するオンライン留学の動向に触れ、これは国際教育交流におけるDXとして、前向きに捉えるべきであると述べています。延原氏は「今後の放課後児童クラブについて 一岡山市の構想に思うこと」と題して、運営形態が様々で諸問題を抱える児童クラブに対して岡山市が提示したクラブ運営の一元化案について紹介し、どうすべきかを述べています。さらに、植木氏は「専門科目における学生による自主学習とプレゼンテーション」と題して、自分の授業にアクティブ・ラーニングを導入した実践例を報告しています。

今回掲載した3編は、それぞれの教育・福祉現場で生じている課題への解決策が示されており、これらの解決策に対する今後の動向が気になるところであります。その意味でも、3編とも興味を持って読んで頂けるものと確信しています。(T.A)

編集・発行：国際教育研究所
〒710-0821 倉敷市川西町 11-30
加計国際学術交流センター内
TEL (086) 423-1611 (代)
FAX (086) 423-1668